

グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義*訳

5 (承前)

過渡期

不安定、貧困、情熱

ヨゼフィーネ・ポイスル

社会主義者・菜食主義者マーラー

リーピナーとの出会い

(1878-1880)

ペルナーストルファー³⁶⁾は仕立屋の息子として生まれたが、生まれる早々孤児となり言うも無惨な貧困の中で育てられた。彼は数年前からすでに彼の名前を冠したサークルの首謀者であり、その思想傾向は社会主義的なものであると同時にドイツ民族主義的なものであった。また、いわば18世紀から続いた伝統的な自由主義である《ヨーゼフ主義》に対して、また他方では、反動的ですらある断固たる保守主義の方向を取ったターフェ首相の現オーストリア内閣の政治に対して反抗した。はじめペルナーストルファーとそのグループはニーチェやワーグナーの作品を研究し論評を加えるだけのものであったが、次第にはっきりと政治的な方向性を取るようになる。しかしながらペルナーストルファー本人は決して芸術に対する興味を失うことはなく、後に、大衆演劇を創始するなど、芸術を労働者階級のわかるものにしようと労を惜しまなかった。このように彼の社会主義は審美主義的な傾向を絶えず持ち続けることになる、つまりはいずれにしてもかなり理想主義的なものということになる。

彼の高校時代の級友ヴィクトール・アドラー³⁷⁾は、ペルナーストルファーとは違って、裕福な階級の出身である。彼の父、ソロモン・アドラーはブラハ出身で投機と不動産で財をなした。ソロモンは当時もてはやされたウィーン郊外のオーバー＝デブリングに住み、息子の友人らを定期的に招いたものだった。彼らは1867年になると *Telyn Gesellschaft* を組織したが、これは後続するあらゆる社会主義集団の母体となるものだった。こうしてアドラーとペルナーストルファーは彼らの友人たちとともに次々とショーペンハウアー (1873)、ニーチェ (1875)、そしてワーグナーの音楽と著作を見つけ出して行く。二人はワーグナー協会に所属して1876年には第一回バイロイト音楽祭におもむき『指環』の初演を見ている。とはいってもアドラーは医者であり、ほぼ全精力を、後には彼の財産をほとんど貧民の医療に費やす。こうして彼は労働者の生活および労働条件についての研究に大半の時間を過ごすこと

170
(111)

* 一般教育 教授 フランス語

になる。オーストリアでは今日でも相変わらず彼は文字通り労働者階級の意識を目覚ました先駆者、社会主義の最も偉大な先駆者と見なされている。彼は普通選挙を獲得するために長い時をかけ熱く戦った。そして5月1日を労働者の祭典とする決定をしたのも彼であるし、1890年と1892年の《国民の祝祭日》を組織したのも彼である。

ペルナーストルファーとアドラーの周りにはマックス・グルーバーとハインリッヒ・フリードユンクという二人の重要な政治家が集まり、さらには若き作家ヘルマン・バル³⁸⁾、マーラーの親しい友人の医学生アルベルト・シュピーグラー³⁹⁾、未来の社会主義理論家でチューリングゲンの労働者の悲惨さを三巻本に論じたハンス・エマヌエル・ザックス、政治理論家のハインリッヒとオットーのブラウン兄弟、詩人でもあるもう一人の医者ヨーゼフ・ヴィンター、そしてフリッツ・レーア⁴⁰⁾。彼は考古学者で、間もなくマーラーの親友仲間の一人となる、しかもその関係は20年以上も続く⁴¹⁾。

マーラーが《ペルナーストルファー・サークル》に参加した日付は正確にはわからない。彼は1878年から *Leseverein* の講演や会合に参加し、そこでジークフリート・リーピナーと知り合ったようだ。そのあとでリーピナーがマーラーをアドラーやペルナーストルファーに紹介した。またマーラーはサークルに作家のリヒャルト・フォン・クラークと同時に参加を認められたらしい。この時代すでにヴィクトール・アドラーは日曜日の夜ベルクガッセの自宅に若い社会主義者の友人らを迎える習慣があった。彼の妻エンマは後に回想録で彼女がマーラーを知った当時のことを描いている。「グスタフ・マーラーとの出会いは私の最も楽しい思い出の一つです。私たちの婚約期間でした。私たちは音楽院の学生たちの最終学年の終わりに行われるファイナル・コンサートにでかけたものです。その中にグスタフ・マーラーがいました。彼は自作の賞に輝いた作品を演奏していました。数年後には個人的に彼と知り合いになりました。彼はリーピナーの友人だったのです。彼がベルクガッセにマーラーを連れてきたと思います。私たちはマーラーのことが、彼の率直さ、彼の謙虚さゆえに気に入りました。

「ある晩のこと、ヴィクトールが彼にピアノで何か弾いてくれないかと頼むと、彼は笑いながら論外ですねと答えました。二人とも驚いて、ヴィクトールは彼にこれほど頭ごなしに拒絶する理由は何か尋ねると、マーラーは答えたものです。アップライト・ピアノを演奏するのは神経に障り、音楽の感受性をそなえた人たちがどうして家の中にこのような拷問楽器をそなえて耐えていられるのか考えられません、と。

「すぐにヴィクトール・アドラーはマーラーをつれてグランド・ピアノを買いに行き試し弾きをしてもらいました。当時マーラーは財政困難な状態だったので、ピアノの家庭教師をしていました。それでヴィクトールが家庭教師の口を探してあげたのです。仕事のしすぎと栄養不良でマーラーはとても神経質になってしまいました。そのことを彼自身もよくわきまえていたので笑って話したものです、大通りを大きな声で独り言を言って歩いてみたり大仰なゼスチャーをしたりすることがたまにあるものだから仲買人たちが彼のところに駆け寄ってきて仕事をしないかと言ってくる、と。(……) ある日マーラーは私たちのところへフーゴ・ヴォルフを連れてきましたが、躰が悪いせいか、私たちの印象は良くなかった。でもおそらく、この不幸な人はもうすでに病にあったんでしょ⁴²⁾。」

ペルナーストルファーとアドラーは彼らの意見と願望を共有する友人たちと私的なサーク

ルを作るだけで満足したわけではない。1871年12月2日にもまた《ウィーン大学のドイツ的性格を支持し、いかなる状況下においてもその性格を表現するため》創設された *Leseverein der deutschen Studenten* を指導している。この協会は1878年すでに400人以上の会員を数え、当時の学生たちに決定的な影響を及ぼしている。ここではすでにドイツ帝国の再建が説かれる一方でとりわけワグナーとニーチェが豊富に語られ、「ワグナー協会」とは緊密な関係にあった。彼らの政治的方向が引き起こしかねない弾圧から逃れるために、当時の議会議員の会員をかなりの人数集めた。とはいっても彼らの存在があったところで、12月18日、彼らを《国家安全のためには潜在的脅威》とみなす政府によってグループが解散させられるのを食い止めることはできなかった⁴³⁾。

しかし社会主義者とドイツ民族主義者はくじけはしないだろう。彼らは、ヴィクトール・アドラーの家に、ウィーンのホフブルク城の前にあるカフェ・グリーンシュタイドルに参集し続ける。1880年10月『パイロイト通信』にワグナーの最後から二番目の論考が書かれ、それによってこのグループのイデオロギーがいくぶん変わることになる、しかも食事の習慣までもが。実際、『パルジファル』をまさに完成しようとしていたワグナーは、『宗教と芸術』で新しい原理を開陳するが、それは宗教と東洋の神秘思想とを研究した結果だった。以来彼には、肉食の習慣がキリスト教文明退廃の主な原因であり、人類の再生は必然的に菜食主義へと回帰することになるのは、明白なこととなった。勿論ワグナー自身は自分の発表した教義を遵守することになるだろうが、彼の影響力、彼の威光はすでに、ウィーンでもどこでも、彼の信奉者を即座に菜食主義者にしてしまうほどのものだった。それで1880年の秋、マーラー、クラーク、リーピナーはラムハルターという菜食主義レストラン⁴⁴⁾での《ペルナーストルファー・サークル》の常連となる。このレストランは小さな洞穴に設えられ、扉の上部につけられた小窓から光が差し込むくらいで酷く暗かったので一日中ガス灯を点けていなければならなかった。何ヶ月もマーラーはここで肉やアルコールをとらず酷い食事をするようになる。ただしこのラムハルターに人々は仲間同士の楽しい食事を取るために来ているわけではなく、お互いの意見交換のために来ていた。ヴィクトール・アドラーは他の仲間よりも菜食主義者になるのに時間がかかり、ハインリッヒ・ブラウンのような確固たる確信を得ようと全精力をかたむけ、菜食主義者になった。しかしそれ以後ラムハルターに足繁く通い、ペルナーストルファーとともに論争を引き起こして場を活気づかせ導いた。

リヒャルト・フォン・クラークやフリートリッヒ・エクシュタインの『回想録⁴⁵⁾』はこのレストランや菜食主義協会の会合の雰囲気を実確に伝えてくれる。相当数の《ナチュリスト、自然回帰主義者》も参加していた。とりわけ、リストの弟子であり秘書でもあったピアニストのアウグスト・ゲレリッヒ、彼は後にブルックナーの伝記作家になる。長い鬚、ライオン・ヘアの長い髪、大きな手で彼はすぐに目についた。というのも彼はエクシュタインが会長をしている《ピタゴラス主義》グループに所属しており、ここでは髯や髪を伸ばし放題にして、田舎風のリンネル生地でゆったりとしたシャツを着て昔風の服を着ることが当たり前なのだから。

このグループには二人の重要な作家が含まれてもいる。この二人はとても興味深い人物ではあったが世に認められず、といって、《ペルナーストルファー・サークル》で二人がになった重要な役割を考えると読者諸子に紹介するに値すると思われる。リヒャルト・フォン・

クラーク⁴⁶⁾とジークフリート・リーピナーである。マーラーはクラークと暫く前に知り合った。それは彼の妹マチルドがブルックナーの生徒で、作曲クラスでマーラーと同期生だった彼女の仲介による。二人はすぐに仲間になってお互いの文学的、音楽的印象を述べ合った、そしてリーピナーが1878年に、二人と一緒にペルナーストルファーに紹介した。このころクラークはウィーン大学で勉強し法学のキャリアになるか文学方面に行くか迷っていた。しかしこのころから彼はあらゆるジャンル、詩、歴史物、エッセー、戯曲と熱心に書き始める。しかも彼は音楽の勉強を全うしたわけではないのに作曲すらしている。1876年にはすでに彼はワーグナーの作品に出会い、同じ年、ベルリンに留学し、テオドル・モムセンの生徒になった⁴⁷⁾。この頃ドイツの理論家フェルディナント・ラサールの全著作を読み社会主義者になっている。ウィーンに帰るとクラークはアルベルト・シュビングラーのところでリーピナーと知り合い、1880年10月には新参者らしく熱烈に妥協せず菜食主義の信仰に従った。間もなく彼は賛歌や聖歌、『我が人民よ、おまえこそ我が神である』といった祈りをくちずさみながら真の社会主義的な宗教を夢見るまでにいたる。とはいえ彼にとってこの社会主義的菜食主義的時代はかなり短い期間だった。この年の暮れになるともう彼は社会主義に背を向ける。ある種の神秘的な啓示を受け、徐々に彼は子供時代のカトリックに帰って行くことになる。

しかしこの菜食主義者グループの思想家、真のスポークスマンはクラークではなく、ガリツィア出身のユダヤ人作家ジークフリート・リーピナーである。彼はその百科全書的な教養、鋭い知性、とりわけ言葉を操るその非凡さによって他を圧倒し、誰にも新しいゲートの到来と印象づけている。後にリーピナーはマーラーの生涯に何度も登場してくるので、ここでは彼の来歴を跡づけてみよう。1856年10月24日ガリツィアのヤロスラフに中流のユダヤ人家庭に生まれるが、詳細はほとんどわかっていない。初等教育を受けるためタルノウに寄留する。そして1871年15歳になってウィーンへ来る。レオポルトシュテッター・ギムナジウムに入学してほとんどすぐに優秀な学生の一人と認められる。生活するために家庭教師をし、そしてすでにあてもなく書きためている。こうして20歳には、長い叙事詩『エコー』、史劇『アルノルト・フォン・ブレスチア』、劇詩『解放されたプロメテウス』、さらに『ショーペンハウアーの原理による至高と悲劇に関する超越的思弁』と題された論文を書くことになる。

1875年リーピナーはウィーン大学に入学する。そこで歴史、文学、自然科学を勉強し、とりわけ、当時としてはまだよく知られていなかったニーチェを専門にする。おそらくマーラーと知り合ったのがこのウィーン大学であり、マーラーが入学登録した1877年以降のことだろう。リーピナーは音楽が大好きでマーラー同様ワーグナーの音楽に惚れ込んでいる。じきに彼はマーラーの友人、相談相手となる、というよりも、マーラーより四つ年上であることから彼にさらなる威厳を与えていると考えるなら、マーラーの信条を導く先輩となる。彼らが出会った頃というのはリーピナーがライプツィヒから戻ってきた頃で、彼はそこで半年ほど大哲学者のグスタフ・テオドル・フェヒナーの講義を受けていた。彼はこの哲学者の著作をマーラーに見せることになる。まだ20歳にもなっていないのに、すでにその華々しい語り口を人々に印象づけていた。1876年末には劇詩『解放されたプロメテウス』を公表し、新しい叙事詩『レナートゥス』を書き始める。この頃 *Leseverein der deutschen Stu-*

denten の *Rede Klub* (非公式ではあるが「ニーチェ協会」と呼ばれる) に加入している。

1877年イェナで彼は哲学者のヨハネス・フォルケルトにニーチェの友人であるエルヴィン・ローデに紹介される。ローデはニーチェに『プロメテウス』を送っており、あわせてリヒャルト・ワーグナーにも送られた⁴⁸⁾。両者ともこの20歳の若き天才に賞賛を惜しまない。ワーグナー、ニーチェ、ショーペンハウアーの三人はすでに若いリーピナーにかなりの影響を与えた。1878年1月、ウィーンの *Leseverein* で注目すべき講演(『現時点での宗教概念を一新すべき諸要素について』)をすることになるが、この講演は協会の尽力によって出版された。このようなことはほとんどありえないことで、それを考慮に入れてもこのことは当時の彼が重要人物の一人だったことを思わせる。リーピナーはこの講演で、ショーペンハウアー、ニーチェ、ワーグナー、フリートリッヒ・アルベルト・ランゲ⁴⁹⁾という思想家グループのイデオロギーに用いられたあらゆる思想を上手くまとめ上げようとした。のっけからリーピナーは言明する、「人類の日常的な概念世界を超越するものをすべて宗教的なものと呼びます、つまり、ことが情動に関係する経験である限りにおいて現実と呼ばれるもののことです。」このように宗教を単なる超越的な情動と定義した後でワーグナーお気に入りの論文を言及しながら完全な人間へ向けてのはじめの一步となるべき主観性への回帰を追求する。「なぜなら人間は分割できないものだからです。人間存在は全体として拘束されずにいられる瞬間は存在しません。存在が強ければ強いほど、その性質を構成する諸要素は力づくでも統一化しようとするものです、統一化された表現を希求するものです。」

次にリーピナーはカントとランゲを引用して唯物論のばかばかしさを証明しようとする。彼によるとそのばかばかしさを意識したものは誰でも「宗教的、芸術的感情」へと回帰するばかりである。なぜなら宗教の凋落は基本的に有望なしるしだからだ。「現実を乗り越えるもののあらわれとして」神話を受け入れる新しい傾向をも明らかにしている。ニーチェの『悲劇の誕生』を引用しつつ悲劇だけが人間に現実の強固な限界を乗り越えさせることが可能であることを証明する。悲劇の苦悩を共有することで人間は人間の一時的な不可分性から解放され自然と統合されるにいたる⁵⁰⁾。「私たちは内面の自然を理解することによってのみ、[……] 個体として私たち自身の意識を失うことによってのみ、言葉の厳密な真の意味で、汎神論にいたるのです。このとき私たちは牧神に、全き一なる存在に、そして神智、神格となる [……]。そう、私たちは変えなければならない、変えなければ、そして傲然と変わらなければならないのです。」リーピナーの理想とは、この「第二の再生、つまり、雲に覆われ混濁した黄昏を追い払うものであり」、新時代の勝利に満ちた夜明けとして描き、人間の活動を回復させ、まさにワーグナーが描いたように、美的・宗教的治癒によって人類を再生させることである。

このように巨匠の言葉を述べ伝えた後、当然のことリーピナーは翌年の夏、ワーグナーのもとを訪れることになる。バイロイトのサロンに「炎と力と激しさとをもって真理を求める使徒パウロのごとく」彼が出現したことは、ワーグナーの最初の伝記作家カール・フリートリッヒ・グラゼナップによって描かれている⁵¹⁾。リーピナーは『レナートゥス』をコジマとマルヴィルダ・フォン・マイゼンブークに読んで聞かせ、完全に二人を魅了した。しかしながらすぐにワーグナーはショーペンハウアーに対する彼の讃辞を非難する、と言うのも随分前から彼はこの哲学者を捨て去っていたからだが、とはいっても、最近発刊されたばかりの

『バイロイト通信』に、ワーグナーはリーピナーのいくつかの論文を《大衆版》の単純で読みやすいものに書き直したものをのせるよう彼に要請した。ところが問題の《大衆版》は原文よりもさらにわかりにくいものになって、この計画はまもなくボツになってしまう。さらにリーピナーとこの巨匠との関係は決定的に危機に陥った、というのも、気の毒なことに、議論の最中この若者はバイロイトから破門させられたニーチェを熱烈に擁護してしまったからだ。リーピナーは常に人に嫌われ人の感情を害する恐るべき才能を発揮するようだ。ニーチェですらすでに過剰に熱烈なこの弟子に倦み疲れ始め、1878年の夏にオーストリアのザルツカンマーグートへあらゆる手を使って彼を来させようとするので結局この弟子は嫌がられてしまった。1879年関係は荒々しく断ちきられてしまう。「リーピナーは私に信じられない無礼さで手紙を書いてきた、と哲学者は彼らが出会って二年もたたないのに書いている。今やっと私はこの礼讃者とその仲間から解放された！」

1878年ブライトコップフ（ライプツィヒの著名な音楽出版社）から出版された一大叙事詩『レナートゥス』と抒情詩集『喜びの書』との間にリーピナーはストラスブルとベルリンに旅をしている。そこで、常に知識に飢えたこの若き詩人は科学の勉強をしようと計画する。ウィーンに帰ると、聖者伝とキリスト教教義、教会史、東洋の神秘とキリスト教の神秘について掘り下げた長い論文を企てる。彼はこの頃『ドイツ新聞』に社会問題、宗教問題について記事を書き生活していた。1880年には五幕の韻文による悲劇『新ドン・ファン』、続いて翌年には、ゴールトマルクのオペラ『マーリン⁵²⁾』の台本を執筆し、このことは彼の創作力が熱く少しも衰えないことを示している。1881年は彼にとって様々な意味で分岐点となる年となろう。国会議長のスモルカの力もあって、国会図書館の司書に任命される。ここに彼は死ぬまで勤めることになる。この職は彼にとって安楽に生活ができ著作に全精力を注ぎ込むことのできる閑職と思われたが、実際は、この新しい職に彼は没頭することになり、かえって文学活動が緩慢なものになってしまった。同年、彼はプロテスタントに改宗しウィーンの大実業家の令嬢ニーナ・ホフマンと結婚する、ただし1891年には離婚してしまう⁵³⁾。この頃彼は大きな文学計画を立てている。巨大な劇三部作『クリストゥス』（プロローグの『アダム』のみが完成する）と、これもまた未完だが叙事詩『修道士ラウシュ』。しかし出版されたのはポーランドの大詩人アダム・ミキエヴィッチの二つの詩集の翻訳だけになる（『タッドイス氏』1882年、『葬列』1887年）。1880年から彼の没年まで（はからずもマーラーの死と同年）リーピナーは以上の翻訳と『修道士ラウシュ』のいくつかの断片（雑誌に発表）を除けば本を出してはいない⁵⁴⁾。以来彼の作品はタイプ原稿によって彼の友人達に読まれるだけになる。

彼と同時代の人たちは彼についてあまりよいイメージを残してはいない、といっても、それはもっぱら肉体的なものではある。背は低く金髪だがいつも乱れて、燃えるような目、話し方は高飛車で初めて聞けばほとんど共感と呼びそうもなかったが、聞くうちに彼の驚くべき言語能力、思想の確かさに思わず引き込まれてしまうのだった。「私は多くの、才能を与えられた人や才人と知り合いになったが、とペルナーストルファーはリーピナーの死後書くことになる。ジークフリート・リーピナーは私がかつて出会った中で最も知性溢れた人物だったと認めざるを得ない。彼にはユダヤ人によく見られるあの鋭い洞察力ばかりではなく、常に物事の本質へと突き進もうとする思想的な深みがあった。しかも彼の知識の広がりさま

さしく人を啞然とさせるものであり絶えず広がりを見せていた⁵⁵⁾。」

人は若い頃の作品にその人物の才能の大きさを見出すものだ。「もしこの詩人が純然たる天才ではないとするなら、とニーチェは『解放されたプロメテウス』を読み終えて驚嘆する。私には天才とは何者なのかもはやわかりはしない。ここではすべてが輝いている。私はここに私自身の自我、高揚し自らを乗り越えた自我を見出したような気がした！」マルヴィルダ・フォン・マイゼンブークはこの作品を「現代の『神曲』、現代をみごとにまとめ上げた作品」とみなした。ところが、誰もが『レナートゥス』(1878)以後幻滅する。この詩で誰もがこの詩人の弱点に気付いてしまう。つまり、人間の青ざめた姿を通して最も抽象的な思想を表現しようとする彼の弱点、それに加えて、安易な詩句に流れる傾向、韜晦趣味、派手な行動への嗜好、そして決定的なのが、その思想に何か独自性が欠如していることであり、その思想たるやニーチェを韻文にしたもの以外の何ものでもないのである。

大人であればこのような欠陥は決定的なものだったが、リーピナーはマーラーと出会ったときまだ21歳を越えていない。文字通りマーラーは彼に魅惑されてしまう。彼の影響は長い間、読書の選択から基本的な哲学的観点にいたるまで、精神世界のあらゆる分野で圧倒的なものになる。当時リーピナーはまさしく興奮の坩堝。宗教概念からは始めて、とりわけギリシャ思想を征服して統合する普遍的なキリスト教から始めて、現代思想を刷新しようと夢見ている。『解放されたプロメテウス』をマーラーが読んだことはほぼ確かなことであり、リーピナーと知り合ったときに再読している。このドラマすべてが「一つの宗教のための人間の闘争を描いている。リーピナーは人類の解放者であるプロメテウスから出発して、人間の内面に神を再生するという至高の目的までの闘争をあらゆる段階にわたって示す。汎神論的礼拝行為は完了し、人間は世界を支配する神々から遠ざかる。人間は神なるもの、権威なるものすべてに対し武器を取る。この戦いは精神の絶対的な自由を人間にもたらす。しかし人間が神から解放されると同時に、世界全体は非人間化する。精神の自由という頂上から人類は無秩序の淵へ落下し、あらゆる受難の猛威に晒される。苦悩のみがこの墮落から人間を救い、精神の自由へと導く……。キリストがタイタンのところに出現する。このとき二つの原理が結合する、プロメテウスの精神の自由と、神性、つまり神なるもの、汎神論的観点で、「宇宙」を支配する精神とみなしうるものすべてを前にした完全なる人間という二つの原理。以上が人類の贖罪という最終目標となる。すべてが「一」である「全体」の普遍的な歌に解消する⁵⁶⁾。」

いまひとつ重要な特徴は、『プロメテウス』を閉じる歌の一つが「永遠の天才—苦悩」への祈願となっていることである。リーピナーによると苦悩とはただ堪え忍ぶものではない、悲観主義者の世界観から派生するものでもない。悲劇の肯定である。「罪」の苦悩から真の「信仰心」が生まれる。ショーペンハウアーのペシミズムから随分遠いところへ来てしまった。「世界の苦悩は生きる喜びの源泉である」とリーピナーは『喜びの書』(1880)に書いている。『プロメテウス』の著者が若いマーラーに及ぼすことになる影響がすでに垣間見られよう。たとえば苦悩が偏在する世界だが、無意味な重圧など何処にもない世界、信仰のみが罪を清める世界だが、あらゆる信仰が「全体」へほとばしる愛の飛翔となって結合するべき世界、汎神論へと向かうがキリスト教の大テーマにはぐくまれた形而上学的思想といったものである。

- 36) Engelbert PERNERSTORFER (1850-1916)、ジャーナリスト、社会主義理論家、1885年に議会上に登場。1888年には社会民主党のトップの座を奪う。彼は生涯ヴィクトール・アドラーとともにドイツとの関税同盟のために戦う。1882年ゲオルグ・フォン・シェーネラーと著名な社会主義的「リンツ綱領」を定めることになるが、これは彼がしきる *Deutsche Worte* 紙上に全文が掲載される。1878年に解体するまで *Leseverein der deutschen Studenten* をリード統括したあとペルナーストルファーは友人らと次々に *Deutscher Leseverein* (1879年12月18日)、それから派生した *Deutscher Klub*、そして *Deutscher Schulverein* (1880年5月13日) を設立する。この最後のものは1884年に全オーストリアで9万人は下らない会員を数えることになる。
- 37) Victor ADLER (1852-1918)、医師、精神科医。当時すでにさまざまなドイツ民族主義サークルの中心で活動する彼の名は知られていたが、ユダヤ人であることが結局非難されることになる。彼は後に最初の統一された社会主義政党を組織し、1907年には、議会上に最多の代議士を送ることになる。また後に臨時政府の外務大臣の椅子を与えられよう。運命の皮肉だが、彼がかくもその到来を願ったオーストリー共和国は、彼の死んだ1918年11月12日の翌日に宣言される。アドラーは生涯マーラーを敬服し、宮廷歌劇場でのマーラーの公演には足を運ぶことになる。1901年の選挙の時のマーラーとの関係は43章を参照。
- 38) Hermann BAHR (1863-1934)、作家、批評家、エッセイスト、小説家。1897年に結成される画家、彫刻家、建築家グループである分離派の主な代弁者の一人となる。(37章参照)
- 39) Albert SPIEGLER は実際には医療に従事することはない。私的に栄養化学を教えることになる。彼の姉妹の一人はハインリッヒ・ブラウンと結婚し、もう一人は後にジークフリート・リービナーと結婚する。
- 40) Fritz LÖHR (もしくは Löwi : 1859-1924) は *Leseverein* で 1877-1878 年の冬期に講演した。マーラーはこの講演を聴きに來ていた。彼は後にオーストリア考古学会の会員になる。
- 41) ドイツ民族主義と社会主義のさまざまな組織の生成と活動については William MacGrath の *Dyonisian Art and Populist Politics in Australia*. Yale University Press, New Haven, 1974 に徹底的に描かれている。
- 42) Emma Adler (1858-1953) の『回想録』のタイプ原稿はウィーンの労働運動史協会が所蔵する。
- 43) *Akademische Lesekammer* と *Deutsch-Oesterreichische Lesekammer* も同じように勅令によって解散される。
- 44) ワルナーシュトラッセと小路であるファーネンガッセの角にある、まさしくウィーンのど真中に位置している。
- 45) Richard von KRALIK : *Tage und Werke, Lebenserinnerungen*. Friedrich ECKSTEIN : *Alte, unennbare Tage*.
- 46) 第4章の注を参照。
- 47) Theodor MOMMSEN (1817-1903)、著名な歴史家、ローマ文明の専門家。1854年から1856年までに四巻本の『ローマ史』を刊行し、これによって著名人になる。1902年にはドイツ人の著述家としては初めてノーベル文学賞を得る。
- 48) ローデ宛ニーチェの手紙参照。第二巻 1887年、P. 196.
- 49) Friedrich Albert LANGE, *Geschichte der Materialismus* の著書。
- 50) このリービナーの講演の一節はおそらくマーラーが良く表現することになる自然に対する汎神論的な概念のもとになったものであろう。これは第三交響曲で表現されたもの以上に決して強く、確信を持ったものではない。
- 51) 『リヒャルト・ワーグナーの生涯』Leipzig, 1911、第六巻。またクラークの回想録にある、リービナーとワーグナーの出会いの物語を参照。
- 52) 1886年にウィーン歌劇場で上演される。
- 53) しかしこの年リービナーはアルベルト・シュペーグラーの妹クレマンティーヌと再婚する。
- 54) 以上の情報は Hartmut von HARTUGEN の論文 : *Der Dichter Siegfried Lipiner (Ludwig Maximilians Universität, Munich, 1932)* から得られた。
- 55) Engelbert Pernerstorfer : *Nekrolog. Siegfried Lipiner (Zeitschrift der Österreichischen Vereins für Bibliotheks-Wesen)*, Jahr. 3, II, 1912, p. 122.
- 56) H. von HARTUGEN : 前掲書、p. 18.